

青森県弘前市南方に分布する付加体について

Accretionary complex to the south of Hirosaki City

植田 勇人 [1]; 盛 美和子 [2]; 佐藤 和泉 [3]

Hayato Ueda[1]; miwako mori[2]; Izumi Satoh[3]

[1] 弘大・教育; [2] 青森古川中; [3] 弘大・教育

[1] Fac. Education, Hirosaki Univ.; [2] Furukawa Junior High School.; [3] Hirosaki Univ

青森県弘前市の南方には、新第三系に囲まれた形で、基盤の付加体が小規模に露出する。生出ほか(1989)は、これらを下位から上位へ向かって三ッ目内川層、西股山層、大和沢川層に区分し、北部北上帯西部の葛巻-釜石帯の延長部にあたるとした。また、豊原ほか(1980)はチャートから三畳紀およびペルム紀のコノドントの産出を報告した。我々はこれらの付加体の岩相・年代・帰属の把握を目的として、弘前市南部大和沢川流域、および東縁部の大鰐町三ッ目内川流域について地質調査を行っている。本発表では、これまでに得られた成果を紹介する。

大和沢、三ッ目内両地域とも基盤岩は泥岩、砂岩、チャート、珪質泥岩、緑色岩から構成される。石灰岩は転石も含めてみあたらない。全般に破断変形による混在相が卓越し、鱗片劈開およびスレート劈開が発達する。これらの片理面は比較的low angle部分が多く、概ね南北走向で傾斜は東、西とまちまちである。露頭では片理面を曲げる横臥褶曲がしばしば見られ、これに新第三紀以降の正立褶曲が重複していると推定される。

当地域に産する砂岩には、緑灰色のものと暗灰色のものがある。暗灰色砂岩は調査地域東縁部(三ッ目内川下流部)に見られ、黒色泥岩を伴う。より西方の地域(三ッ目内川上流部~大和沢川流域)には緑灰色砂岩が産し、黒色泥岩と緑灰色凝灰質泥岩の互層(~混在相)を伴う。いずれのタイプの砂岩も斜長石と珪長質火山岩片に富む石質~長石質アレナイトであるが、暗灰色砂岩のほうがやや岩片に乏しく斜長石片に富む傾向がある。花こう岩片やカリ長石片はごく少量含まれる。

緑灰色砂岩と密接に産する泥岩や凝灰質泥岩からは、保存不良ながらも *Canoptum* 属とみられる塔状放散虫が共通して含まれることから、泥質岩の年代は後期三畳紀~前期ジュラ紀の可能性が高いと考えられる。暗灰色砂岩に伴われる泥岩からは、放散虫化石は未発見である。

これまで北部北上帯~渡島帯から報告された泥質岩の放散虫化石年代はジュラ紀中~後期であり、弘前南方の付加体はこれより古い可能性が出てきた。砂岩の組成も北部北上帯から報告されたものより岩片質である。当地域は北部北上帯の延長部とするのが妥当と思われるが、北上山地に露出している付加体よりも内弧側を構成する古いユニットが露出しているのではないだろうか。